

第2章 第2次地域福祉活動計画の 取り組みを振り返って

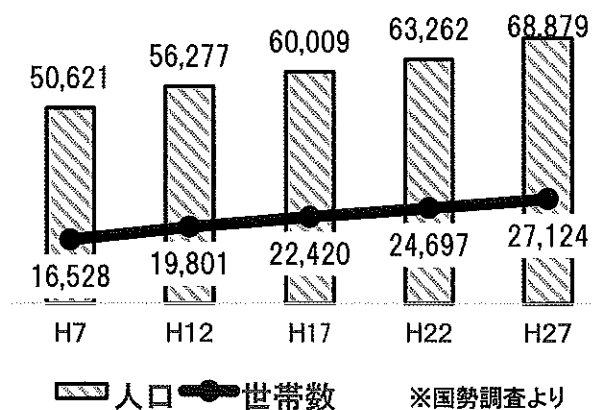
京田辺市においては、大都市圏への交通の利便性の高さ、豊かな自然も残る住環境の良さから、人口や世帯数が増えています。近年、開発が進む北部や南部地域、市の中心で主要な駅がある旧村地域では、新しい家や集合住宅が建ち、特に子育てに励む若い世代が増え、地域を支えています。しかしながら一方で、昭和40年代から50年代にかけて新興住宅地として大規模に開発された地域では、コミュニティを築いていた世代が定年退職を迎えて、急速に高齢化が進んでいます。

地域は、生活の拠点であり、そこで暮らしを営む住民の思いやつながりによって、安心や安全、暮らしやすさなど地域性が形づくられていきます。これから迎える人口減少社会を考えた時、生活拠点が離れている身内や親類以上に、同じ地域に住む人たちが頼りとなります。住民同士のつながりや支えあいが、一人ひとりの心と暮らしの支えにつながっていきます。

こうしたつながりや支えあいは、自治会活動などの地域で住民が集まる行事などの交流を通じて培われます。高齢化や人口が減っていくと担い手や地域の活動、交流の機会も減って関係が希薄化していきます。

家族や親類との生活圏域が離れてしまいすぐに支え合うことが難しくなっています。相談や暮らしの課題を抱えていても、頼ることができず、一人で抱え込んでしまいがちになります。誰にも打ち明けることができずに、地域との関係に距離ができて、希薄化し、孤立してしまうのです。

人口・世帯数の変遷



年齢を重ねていくほど、心を交わすことができる世代の交友関係が少なくなり、‘ひとり’になってしまいます。それを防ぐためにも、近隣住民だけでなく、自治会や地域住民のために組織された団体との関係やその活動が、つながりや関係を育て、一人ひとりの心と暮らしを支える「縁の下の力持ち」となります。自分達が住む近隣住民や地域のことについて関心を持ち、コミュニケーションをはかり、関係や思いを共有して、活動を支え、進めていくことが、一人ひとりが望む安心につながっていくと考えています。

そのためにも区・自治会単位での懇談や地域の福祉活動の支援を通じて、また市という地域圏域での社会貢献に取り組むボランティアや福祉関係団体とコミュニケーションをはかり、地域課題を共有して、一緒に取り組みたい事業を「地域福祉活動計画」という形で示し、まとめました。

第2次地域福祉活動計画では、5つの基本目標を設定し、1つ目は、分会（区・自治会単位の社協組織）による福祉活動に関すること、2つ目はボランティア活動の推進に関すること、3つ目は福祉団体や機関など組織間の連携、4つ目は市民向けの福祉サービスや相談事業、最後は、社協の運営に関することというようにテーマ別に、具体的な取り組みを提示し、5ヶ年計画で進めてきました。

この間の取り組みについて振り返り、成果や課題などを整理しました。これで終わることなく、次のステップに向けた歩みにつなげていきたいと考えます。

基本目標1「安心して暮らせる地域(ま)づくり」に向けて

地域での居場所づくり、住民同士の関係づくりをはかること、そして孤立しがちな住民の把握や励まし、住民と地域とのつながり、安心して暮らせる地域(まち)づくりをはかるためにふれあいサロン活動を推進してきました。

高齢者を対象に長年取り組んでいる親睦会や、子育て世代の住民が多い地域では子育てサロン、そして、近頃は、世代に関係なく住民全体の交流をはかる活動に取り組む地域も出てきました。

子どもから高齢者が安心して暮らすためには、住民同士の交流も大切で、顔が見える関係づくりは、区・自治会や住民同士の協力がないとできません。

こうした福祉活動を通じて、地域との接点が少なく、誰にも打ち明けられない深刻で潜在的な課題を抱える高齢者や住民がいることがわかってきます。日常的な関係が築きやすい近隣の住民同士が寄り添い、悩みなどを把握し、適切な支援や専門的な機関等につなげる見守り活動の普及や支援をはかりました。プライバシーへの配慮などの難しい課題はありますが、給食サービスやテレホンサービスなどの取り組みとあわせて、さらに進展させていきたいと考えています。

そして、住民や地域への貢献するために日々活動する関係者と懇談会など※（活動報告4を参照）を開催し、地域の活動や暮らしに関して気になること、不安に思われることなどを聞かせていただきました。これからの10年、20年先を見据えて、社協として、地域全体で課題を共有し協働しないと安心なまちづくりの構築が困難であることを改めて気づかされました。

田辺子育てサロン



毎回、たくさんの親子が集まって親睦をはかっています

南山西分会での見守り活動



社協役員と老人会、民生委員・児童委員が訪問しています

見守り活動は、様子伺いや安否確認だけでなく、安心と信頼関係を築く取り組みです

基本目標2 「支えあいの心と担い手づくり」に向けて

本会に登録するボランティアは女性が中心で、子育てが落ち着いた世代や定年退職を迎えた方が活躍されていますが、新たな担い手の確保が課題となっています。特に長年活動が続いているボランティアグループでは、会員の高齢化により、これまで通りの活動が困難になりつつあり、組織の中心となる活動者が不足してきています。

そのような状況のなか、団塊世代が定年退職を迎えるにあたり、男性を対象としたボランティア活動へのきっかけづくりの取り組みや、大学があるまちとして、同志社大学・同志社女子大学と連携したボランティア事業の推進に向けて取り組みました。

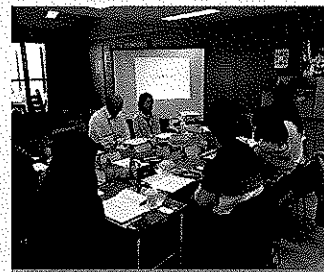
活動報告1

『TANABE♡PROJECT』

若い世代が地域とつながり、地域のなかでボランティア活動を始めるきっかけづくりを進めるため、関係者が集まり新たなボランティアプログラムの構築に向け、検討を行いました。

<プロジェクトメンバー>

- ・ASUID京田辺（学生ボランティアグループ）
- ・同志社大学ボランティア支援室
- ・同志社女子大学ボランティア活動支援センター
- ・入り口デザインプロジェクトチーム
- ※京都府社協の事業による市町村社協職員ボランティア担当者チーム
- ・京田辺市社会福祉協議会



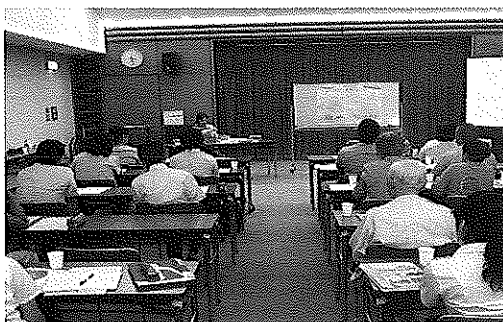
学生の活動者や学生を支援している大学のボランティアセンターとつながることで、それぞれの思いや資源、課題などを共有することができました。

《今後に向けて》

引き続き、プロジェクトメンバーを中心として検討を進め、学生が地域を知り、地域に入ってボランティア活動を始められるきっかけとなる具体的なプログラムづくりを進めます。

男性を対象としたボランティア活動のきっかけづくりについては、実施方法などを再検討し、「社会貢献」や「自己研鑽」、「支え合い」などを意識した働きかけや仕組みづくりを進めていきます。

また、次世代を担う子どもたちに向けては、支えあいの大切さを学び、思いやりの気持ちを持ってもらえるように教育機関、福祉施設などと協力して福祉体験学習を進めました。



子ども達だけでなく先生向けの研修もすすめました

近年、各地で大規模な災害が発生しています。不測の事態に備えて災害ボランティアセンターの体制づくり（※活動報告2参照）を進めました。

活動報告2

『京田辺市災害ボランティアセンターの設置』

平時から地域住民や関係団体と連携し、防災や減災に関する取り組みを推進できるよう常設型の災害ボランティアセンターを設置すると共に、関係者（機関）による運営委員会を設け、体制づくりを進めました。また、京田辺市と「京田辺市災害ボランティアセンターに関する協定書」を締結し、それぞれの役割を確認しました。



平成29年度災害ボランティアセンター設置・運用研修のようす

“常設型”のセンターとすることで、普段から関係者が集まり、体制強化に向けた検討や研修会を行うことができました。顔の見える関係は、災害発生時の効果的な支援につながります。

《今後に向けて》

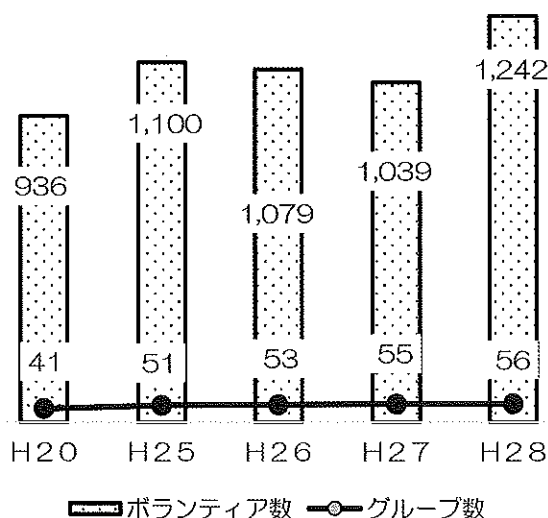
災害ボランティアセンターの役割を地域へ向けて周知するなかで、運営に関わっていただける「災害ボランティア事前登録者（団体）」を募ると共に、登録者に対するフォローアップを行っていきます。

基本目標3 「組織的なつながりと活動の強化」に向けて

本会に登録し活躍するボランティア及びボランティアグループは、増加の傾向にあります。担い手づくりだけでなく、活動者への支援も重要となっています。

支援を必要とする人や地域のために何かをしたいという人の思いを受け止め、つながりづくりや実際の活動に向けてのサポートが必要です。

ボランティア登録状況



グループ支援においては、ボランティア連絡協議会と話し合いを行いながら、ボランティア登録の見直し等、組織的な活動を進めるための整備をはかりました。

本会では長年にわたって、障がいのある方やひとり親世帯といった当事者で構成され、会員や福祉向上のために取り組んでいる福祉団体、いわゆる当事者団体を、運営や活動面で支援してきました。

当事者にしかわからない、暮らしの中で抱える不自由さなど社会的な障害を明らかにして、社会に投げかけて、制度やサービスの改善、障壁を失くし、今のバリアフリー社会の礎を築いてきました。

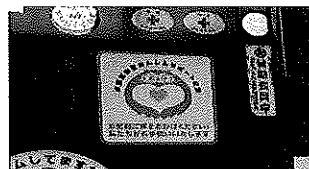
しかしながら、近年は組織活動離れが進んで、会員の減少、スタッフの高齢化などで運営がままならない団体も増えています。



障がいのある方とボランティアが集まったの懇談会

当事者団体が担う役割はまだまだたくさんあります。思いを尊重して、必要な支援を心掛け、社会参加しやすい環境や仕組みづくりについて、当事者と一緒に取り組んでいかなければなりません。

そのためにも、ボランティアや福祉関係団体、施設だけでなく、市民の暮らしに関わる店舗や一般企業などにも働きかけ、誰もが安心して暮らせる地域づくりに向けて、連携をはかっていきたいと考えます。



京都高齢者あんしんサポート企業研修の実施

企業や事業所でできる福祉サポートに関して啓発・登録を呼びかけました。

活動報告3

意見交換会の開催

障がい者への地域支援について考えようと、市内で活動している障害者団体の方と支援しているボランティアが集って懇談会を開催しました。

○障がい者とボランティアとの懇談会

障がいのある方は、日々の暮らしの面でなく、移動や情報の把握など社会生活面で個々の当事者の方にしかわからない不自由さを抱えています。暮らし、社会参加、災害時の不安、そして各団体の活動などいろいろなことを話し合いました。

この日の懇談会では、障がいのある方の暮らしの困りごと、ボランティアからは自分達の活動に関して話し合いましたが、もう一つのテーマ、災害時の支援についての話は大変盛り上がりました。

障がい者のある方については、足が不自由な人、視覚障がい者の方は避難所までの誘導、聴覚に障がいのある方は避難情報の提供などその時の必要なサポートが異なります。でも共通するのは、近隣住民の支援が必要で、そのためにも日頃からの関係づくりの中で、自分達の存在と障がいを知ってもらうということでした。そうした地域との関係づくりも今後の課題です。

○福祉施設や事業所関係者との懇談会

障がいのある方の生活を支えている施設や事業所があります。普段の活動から感じる障がい者の支援について把握しようと下記の施設、事業所の方々と意見交換をはかりました。

- ・協力施設および事業所（順不同）
京田辺市障害者生活支援センター「ふらっと」
NPO 法人ソーシャルアクション・パートナーシップ
山城就労支援事業所「さんさん山城」
京田辺市社会福祉協議会ホームヘルプセンター

主な意見

・催しがあってもバス利用で直接行きにくいなど交通の便や会場や施設の利用の関係で、障がいのある方達が行く場所、行ける場所が少ないので、引きこもってしまう。以前に比べると広がってきているが、移動手段や利用への配慮が進むと、もっと外出も進むだろうし、市民も対応してくれるようになるのでは

・日頃から接点を持つことが大事。有事の際に障がい者が過ごせる場所を確保すること。自分のことを知ってもらうことがどれだけできるか。学校での教育、文化的イベントへの参加などいろいろあるのではないか。

・施設の活動である農業活動を、市民の人や当事者同士の交流の場として様々な形で活用してもらったりするなど貢献的な取り組みも進めていけたらと考えているところもある

基本目標4「安定した生活づくり」に向けて

高齢者や障がい者が住み慣れた地域での暮らしを望む反面、生活の不自由さや不安を感じ、またそれを支える介護者の心身の負担が大きいのが現実です。

そうした不安、負担を軽減し、寄り添った生活支援が行えるよう、職員間での情報を共有し、誠意を持って対応にあたりました。

介護は決して他人事でなく、誰もが直面する可能性のある問題です。現在、問題を抱えている人だけでなく、まだ関わりのない人であっても、介護の知識や技術を得ることは大きな備えとなります。その一助となるよう「介護のひろば」などを開催しました。

超高齢社会を迎え、団塊の世代が75歳を迎える2025年には、認知症高齢者が700万人を突破し、65歳以上の5人に1人が罹患すると予測されています。認知症は自分自身や身内、親族にも関わる大変身近な病気でもあります。周囲の人が適切に関わりや支援の方法を知る事で、認知症の人もその家族も地域で安心して暮らすことができます。

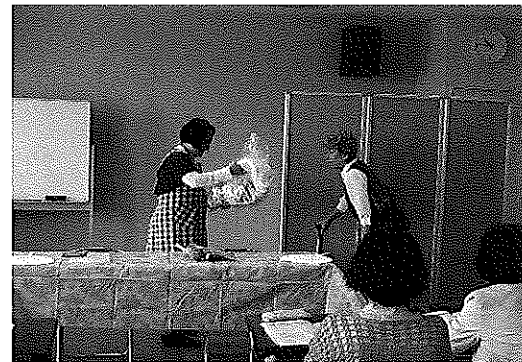
まずは正しい知識と接し方を知り、地域社会全体で支えることを目的とし「認知症サポーター養成講座」を開催しました。多くの方が受講され、サポーター（応援者）が誕生しました。

核家族化が進み、家族介護力は低下している現代、介護保険サービスなどの必要性が高まり、サービスを提供する側の責任も大きくなっています。しかし、公的なサービスだけでは利用者の思いに沿った地域生活の実現は難しく、地域社会全体で支える仕組みづくりが急務となっています。

近年は、体調や運転技術への不安から運転を控え、運転免許証を返納する高齢者が増えています。それに伴い、日々の買い物が困難になったり、外出をすることなく引きこもりがちになるといった新



ヘルパーが、負担があまりかからない介護の仕方やコツを指導しました。



認知症サポーター養成講座

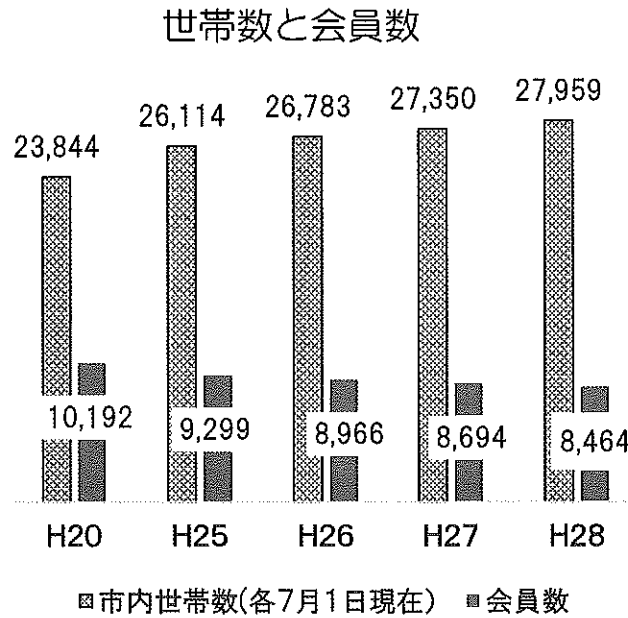
寸劇を交えて、認知症やその心構えを周知しました。小中学校でも行って、サポーターの輪が広がっています

たな問題も浮き彫りになっています。こうした地域課題の解消に向けて、地域福祉部門の職員と利用者と日々関わっている在宅サービス部門の職員間での情報の共有化をはかり、地域住民の暮らしのニーズに寄り添った支援やサービスの検討が必要であると感じています。

基本目標5「福祉を支えるための基盤強化」に向けて

本会の活動は、市民による、市民のための取り組みを、市民が主体になって進めることを前提としています。そのため、市民が会員となって、集めた財源を基に、市民1人ひとりの暮らしが豊かになり、地域が暮らしやすくなるための活動や事業の展開ならびに支援をしています。

人口や世帯数は増えていますが、地域福祉を支える会員の数は減少しています。社協活動や地域福祉を支えているという点や募った貴重な会費や募金が、自分の住む地域や暮らしにどのように活用されているのかわかりにくいという指摘があります。自分たちが、社協会員としてどのように市民の暮らしや地域の活動に貢献しているのかについてもわかりにくいのが現状です。



※市内世帯数は京田辺市統計書より

社協の活動と市民が会員となって支えている仕組みについて、各世代にわかりやすく伝える方法や手立てを検討し、実践し、多くの市民の参加をはかっていきたいと考えます。

また、近年、新しく立ち上がった自治会との関係や市民への啓発も進めていきます。

活動報告4

地域懇談会の開催（その1）

地域福祉活動の推進をはかるために、第2次活動計画の推進期間の中間年にあたる3年目の平成27年度に下記のとおり懇談会を実施しました。ふれあいサロン活動の推進だけでなく、戸別に訪問する「見守り活動」の推進をはかるため、各地区での高齢者などの要配慮者への支援や把握、活動状況などについて意見を伺いました。

支 部	分 会	日 時	場 所	参加者数
田辺支部	田辺,興戸,西住宅	11月6日(金) 午後7時～	社会福祉 センター	17名
河原支部	河原,東住宅,府宮団地	11月14日(土) 午後1時30分～	社会福祉 センター	37名
普賢寺支部	多々羅,普賢寺,水取 打田,高船,天王	11月17日(火) 午後8時～	水取 公民館	22名
大住第1支部	松井,西八,東林 岡村,三野,松井ヶ丘 山手東,山手南 ファインパーク	11月29日(日) 午後1時30分～	北部住民 センター	30名
薪支部	薪,一休ヶ丘	11月30日(月) 午後1時30分～	社会福祉 センター	25名
大住第2支部	健康村,健康ヶ丘 大住ヶ丘1～5丁目 花住坂	12月1日(火) 午後7時～	健康ヶ丘 公民館	22名
草内支部	東,草内,飯岡,新興戸	12月4日(金) 午後7時～	社会福祉 センター	24名
三山木支部	高木,二又,同志社住宅 山崎,山本,出垣内 南山東,南山西,江津 宮ノ口,同志社山手	12月5日(土) 午前10時～	社会福祉 センター	22名

延べ参加者数

社協関係…40名 区・自治会…55名 市民児協…88名 老人会…16名
京田辺市地域包括支援センターの職員1名（各回参加）

地域福祉活動を進めるための意見がたくさん寄せられました。主なものを下記のとおりまとめました。

◎ ふれあいサロン活動について

【高齢者を対象にしたサロン】

- ・本会で進めてきたサロン活動について、長年取り組まれている地域では、参加者も、活動も定着し、欠かすことができない取り組みとなっています。

- ・参加者の配慮した催しや工夫をこらした取り組みが進められている。

（おたっしゅ応援事業（血圧測定や健康相談、介護予防や健康、機能維持をはかるための話や催しの実施）の活用
親睦をはかりやすいように、おしゃべりやゲーム、喫茶の実施。）

- ・新規の参加がなかなかない。

- ・誘ってもなかなか来てくれない。

- ・区、自治会が管轄する地域や世帯数が多い区・自治会では、拠点である公民館までの距離や起伏があるなど、高齢者が自力で来るのは困難で、参加につながりにくい。

- ・年齢を重ねると、ゲートボールなど活発な老人会の活動に参加しにくく、退会する高齢者が多く、家にひきこもりがちとなる。そうした人たちが地域に出て、関係をつくる場としてサロン活動に取り組み、今では、支援者（民生委員・児童委員）との関係づくりや情報把握の場となっている。

- ・民生委員・児童委員がきっかけとなり、担い手となり、地域参加や要配慮者の情報把握を行うためにサロン活動を実施している地区もあれば、孤立する高齢者など戸別訪問（見守り）へ力点を置き、サロンなど関係づくりは区・自治会や老人会など地域全体で進める形への転換をはかる地区もあって、方向性が異なってきている。

- ・話や講演を聞く催しは、参加が少ない。外出する催しへの参加は男女問わず参加がとても多い。

【子育てを対象としたサロン】

- ・子育てや子どもの数が増えている地域では、民生委員・児童委員が中心となって進められている。

- ・サロンとの併用で見守り活動を実施し、把握や周知を行っている。

◎ 見守り活動について

- ・防災意識や活動が高まり、要配慮者の把握や状況確認のために見守り活動への関心や考える意見が多くあった。
- ・個人情報扱いや対応などへの不安は引き続き高かった。

◎ 災害支援の取り組みについて

- ・市が行っている避難所運営訓練が各校区ですすめられるようになり、防災や避難対策への意識が高まり、要配慮者の把握や名簿づくりに取り組む、または取り組みたい地区が増えた。
- ・要支援者情報登録制度について、自主防災会が組織化されている地区ほど名簿づくりや対策などが進む一方で、制度を知らない地区も多く、差があった。
- ・自主防災組織があっても、いざというときに役員と区・自治会、住民の間でどのように動くか、模索、検討している地区が多い。
- ・飯岡区では、自主防災組織化がいち早くすすめられ、長年にわたって取り組みが進んでいるので、住民の意識は高く、役割（物資分配や救護などの6つの役割）分担を行って、毎年更新しているところがあった。
- ・具体的にどのような形の取り組みがあるのかわからない。参考となる他の地域の取り組みや進め方について、紹介して欲しい。

◎ その他

【区・自治会の活動について】

- ・役員の任期が1年交代のところが多く、防災や見守りなど継続的な活動に組み込みが難しい状況のところも多い。
- ・毎月地区の会議の中で、年2～3回地域包括支援センターの職員が来て、情報提供を行っている。
毎月の区長会、班長会で、年数回民生委員・児童委員が出席して、活動内容を報告し、情報交換を行っている地区があった。
- ・子ども達を大切にしたい地域の行事が各地で行われている。

【老人会の活動について】

- ・旧村地区においては、老人会の存在意義が大きい。加入年齢に達した住民はほぼ全員加入し年間行事にも参加している。

- ・地区の老人会で年間行事として、サロンや、ゲートボール、グランドゴルフなどで集まる機会をつくり、親睦をはかるなど熱心に取り組んでいる様子が伺えた。

- ・60代～70代の若い高齢者の加入や行事への参加が進まない一方で、年齢の高い高齢者が参加できない行事などで退会する人も多く、孤立しがちになる。

【社協の活動について】

- ・子育てサロンなどの行事が、社協会員の加入や共同募金に支えられている趣旨を説明しても、子育て世代の反応は悪く、加入などにつながらない。

- ・チャリティーバザーの回覧などで提供品の募集、告知があるが、もう少し具体的に、何のために使われるのか、周知してほしい。

◎ 懇談会のまとめ

- ・長年にわたって取り組みが行われているところは定着化しているが、新規参加者の促進や担い手の確保など解消されていないところがある。

- ・地域で進められている福祉活動の推進や展開を図っていく上で、民生児童委員の存在や役割、力の大きさを改めて認識させられた。

- ・福祉活動のすみ分け、役割分担をはかろうとしている所がある。高齢者に対する取り組みは、新興住宅地については、民生委員・児童委員、それ以外の地域については主に老人会という形で担っている。

- ・区、自治会の運営が、役員任せになって負担が大きくなっている。通年の行事がたくさんあって、それを進めていくのが精一杯で地域ぐるみで福祉を進めていく余裕がない。

- ・地域組織や住民の中で、共助や要配慮者の把握、防災への関心や意識は高まり、取り組みも拡大しつつあるが、やはり個人情報把握や扱い方法への戸惑いが強い。

- ・市が行っている小学校区ごとの避難誘導訓練や要支援者登録制度といった取り組みが契機となり、自主防災の組織化や活動が活発になっている。

- ・地区によって、老人会に加入する高齢者や年齢層、背景がまったくことなり、行事への参加具合も異なる。同世代が集い、憩いの場となる老人会の活動が、参加できない行事や活動により退会する現状があった。

意見交換会も開催しました（その2）

平成27年度に実施した地域懇談会に加えて、平成29年度8月から10月にかけて、一部の地域ではありますが、ふれあいサロン活動など福祉活動終了後に、地域役員やスタッフの皆さんに集まっていただいて、社協へのイメージや意見などを伺いました。一部ではありますが、報告させていただきます。

【社会福祉協議会のイメージや活動について】

- ・社協会員になってもらえない原因
⇒ 若い世代の方に十分周知されていないので、社協が何をしているのかわかっていない
- ・社協 = 高齢者 のイメージ
- ・住んでいる地域から遠いため行く機会もなく、あまりよくわかっていない
- ・社協のやっていることを細かく書いたものがないのか
- ・会員募集の時には、一軒一軒回ってもらっているので、社協に会費を払って協力しているという意識は持ってもらっている
- ・区で（会費を）まとめて払っている地域は、《社協会員となっていることについて》意識を持つのは難しいのではないか
- ・（地域福祉がわかりにくいので）区と福祉（社協）と民生委員・児童委員の連携がはかりにくい。
- ・サロン開始当初は区が中心となって進めていたが、区の役員としてかかわるのは大変だということで、現在では民生委員・児童委員や福祉の役員が中心となり進めている。区役員も広報活動など一緒にやってもらえたらよい
- ・役員になるまで、共同募金、日赤募金、社協会費などの区別が分からなかった
- ・市の中に社協があると思っていた
- ・社協は地域の事情も理解していただいていてきめ細かく対応してもらって助かっている

- 社協だよりは見ているが、子世代はいないというところもある
- 社協の事業を理解してもらうためには、社協の方に地域に来てもらって話してもらうのがよい
- 社協役員については2年任期で副分会長から分会長へと、トータルで4年の関わりがあり、責任をもって担ってもらっている
- 社協チャリティーバザーについても(取り組み方などの)意見を出し、非常に熱心に取り組んでいる
- 自治会等への加入についてシビアであり、募金や会費などは少額しかしてもらえないところがある
- はじめは非協力的であっても、だんだんと定着してくると理解をしてもらい協力してくれるようになってきたところもある
- 区役員から社協の事業の事や仕組みなど伝えてくれているので、会費や募金などは若いとか老人とかはあまり関係ないのではないか
- 会議の場などで説明しても、わかってもらえない方には理解は難しい

地域懇談会や意見交換を通じて、地域や市民の皆様の社会福祉協議会への認知度の低さ、貢献ができていない部分がたくさんあることを痛感しました。

こうした声の一つ一つが社会福祉協議会の活動や、地域の福祉活動及びボランティア活動、そして福祉サービスづくりとなり、地域生活や暮らしの向上へとつなげています。

市民や地域にとって、身近で、頼りがいのある社協づくりを目指していきます。